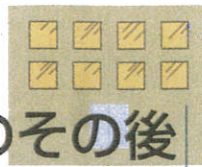


連載 16

# 住み替えを 選んだ人のその後

栗原道子



利用者の支援に携わる  
西原由紀さん



都内で、障がい者がフラワーアレンジメントの技術を学びながら働ける場「アプローズ南青山」(就労継続支援B型事業所、2014年4月開設)を運営するアプローズ(光枝茉莉子社長)は、そうした事業所などで働く人が

利用する「通過型グループホーム」(東京都港区)を16年4月から運営している。生きづらさを抱える、精神障がいのある人たちの生活や就労を支えている。

通過型グループホームは、利用期間は2〜3年程度を限度として、個々に自立目標を持つ精神障がいをもつ人へ、次のステップを探す手伝いをする障がい者施設。安心できる環境で自立を目指す場である。



「アプローズ南青山」が販売する花かご

話す。ともに支援を受ける。支援を組み合わせさせた支援も関わっている。現在3人が一般企業に就労している。健師や訪問看護師、主治医との連絡を密にとり、皆さんが安定して暮らせるように心配りをする毎日だ。マンションの5階には、食堂や調理場、応接間などがある。お風呂は居室のあるフロアに設置されている。話す。ともに支援を受ける。支援を組み合わせさせた支援も関わっている。現在3人が一般企業に就労している。健師や訪問看護師、主治医との連絡を密にとり、皆さんが安定して暮らせるように心配りをする毎日だ。マンションの5階には、食堂や調理場、応接間などがある。お風呂は居室のあるフロアに設置されている。

## 通過型グループホーム「アプローズHouse」

# 精神障がいもつ人の生活と社会復帰を支える

り、精神科に継続して通院ができ、服薬を自己管理できる人、単身生活を自指している人たちの住まいである。今回はそのグループホーム「アプローズHouse南麻布」を訪れた。

◇

同ホームは、おしゃれな街並みがひろがる東京メトロ広尾駅のすぐそばにあるマンションの、5〜7階に位置している。定員は6人で、現在は20代から50代の男女3人ずつが6、7階のキッチン付き

の居室に暮らしている。

利用者はここから仕事に行く人、デイケアに通う人、アプローズ南青山などの作業所に行く人もいる。

管理者の西原由紀さんは、サービス管理責任者や精神保健福祉士、産業カウンセラー、公認心理士の有資格者で、入寮者のお母さんのような雰囲気。西原さんは「人間たれしもあることですが、精神障がいの症状により、意思疎通が難しくなる時があり、誤解が生まれることもあり」と

浴室をそれぞれ3人で共用する。平日の食事は食堂で職員が手作りし、提供してくれるが、今後の自立に備えて、土日は自炊をする日としている。

西原さんは料理が得意で、その料理がコミュニケーション役を果たすこともあるという。

ここで生活して就労につながる。倉庫のライン作業や事務の仕事に就いた人がいる。また以前からアプローズ南青山と連携をとり、通所と生活

なのです」と話す。

◇

東京の真ん中で、障がい者に寄り添って生活面を支え、障がい者自身が自分で歩く力を自ら養い、社会で生きられるように手助けと見守りをしていく通過型グループホームだ。アプロ



5階にある食堂兼リビング(「アプローズHouse南麻布」のブログより)

特塊の半歩先の

「コロナ禍で退職者の私たちが「ジネス」での第三の場を提唱した行くところ。満・不便のなるからだ。その後社会で、若者向けにオケにシニマリ、カフオケの第三のなつた。ところが、オケはクラ